

[泌尿紀要 1 卷 1 号]
昭和 30 年 3 月]

巨大な膀胱憩室の手術例

(白斑、結石を合併せるもの)

京都大学医学部泌尿器科教室 (主任稲田務教授)

助 教 授 加 藤 篤 二
講 師 多 田 茂
助 手 仁 平 寛 巳

緒 言

膀胱憩室は稀なものではないが、本邦に於ける報告例は市川教授等によれば約 100 例で、この中憩室治療の目的で手術を施行したものは僅かに 20 数例に過ぎないとされている。吾々は容量 180cc の膀胱憩室で内に多数の砂様結石を入れ、且憩室白斑を合併せる 1 例を経験したのでここに報告する。

症 例

患者：32 才の既婚男子，初診昭和 27 年 8 月 26 日，主訴，排尿時疼痛。家族歴に特記すべきものなく，既往歴として 19 才で肋骨カリエス（手術），20 才淋疾，25 才急性腎炎，29 才の时会厭部打撲にて血尿，排尿痛あり，尿道狭窄を来たして治癒し，プージャーによる数回の尿道拡張術により以後は何等の障害なく経過していると言う。

現病歴：約 3 ヶ月前より排尿時疼痛あり，且つ残尿感が常に存し，時に二段排尿を見る。血尿，尿線中絶等なく，発熱，腹部疼痛等来たせる事なく，排尿回数 は昼間 2 時間に 1 回，夜間 1 ～ 2 回。

現 症：体格，栄養中等度，睡眠，食欲，便通共に正常，胸腹部に異常所見を認めず。両腎触れず圧痛もなく，膀胱部に圧痛あり。鼠径部，陰茎，辜丸，副辜丸，精索，前立腺の触診所見に異常を認めない。

尿所見：黄褐色中等度に濁濁，蛋白 (+)，赤血球 (-)，白血球 (++)，上皮細胞 (+)，球菌 (+)。

膀胱鏡検査：膀胱容量 150cc，粘膜正常，膀胱後壁の左下部に大豆大の憩室口を認め，その周囲に血管拡張を見る以外に変化なし。青排灌試験は右側初発 4 分 27 秒，深青 5 分 27 秒，左側初発 4 分 55 秒，

深青 5 分 22 秒である。

膀胱レ線像：造影剤 (30% 硫酸バリウム・ヒドロゾル) による膀胱レ線像で憩室を描出する事が出来なかつたので，尿管カテーテルを憩室口に挿入すると約 4cm 入り，之より造影剤を注入して膀胱の左側に鶏卵大の憩室影像を認める事が出来 (第 1 図)，更に大量注入により膀胱像をも共に描出した (第 2 図)。

手 術：10 月 28 日膀胱憩室剔除術を施行した。即ち下腹部正中切開により膀胱に達し，膀胱内に約 100cc の空気を入れ膀胱壁に沿って後壁の左下部を鈍的に剝離するに比較的容易に憩室に達した。憩室と膀胱壁との癒着はあまり高度ならず，之を鈍的に剝離して約示指大の憩室茎を確め，左側尿管は憩室の外を廻って憩室口の約 1cm 下方で膀胱に入るを知り，憩室口に於て剔除し膀胱壁は二重縫合を施し膀胱内には留置カテーテルを置いて手術を終る。

剔除標本：憩室の大きさ $6 \times 5.5 \times 4.5$ cm，重量約 200g。内容は白色に濁濁して粘液様膿液又微細鱗様物質を混じ，白色砂様の結石多数 (第 3 図) を入れ，憩室口は直径約 1cm，憩室容量は約 180cc。憩室内面の粘膜は一般に濁濁し一部灰白色粗なる部分がある (縦断面第 4 図)。

憩室壁の組織学的所見：

1). 表層は空胞状の細胞，下層はクロマチンの濃染する基底細胞よりなり，その限界は明瞭な割線を形成する (第 5 図)。

2). 表皮層は肥厚増殖著しく，その内に毛細管の侵入が見られ，上皮巢の深部侵入も認められる (第 6 図)。

3). 上皮巢の下端で基底細胞巢中に空胞化した明かな細胞 (Bowen 様細胞) が見られ，基底細胞中には異型が若干認められる (第 7 図)。

4). 同様上皮下端が間質に向い木の芽状に増殖す

(第8図)。

5). 同上棘細胞中に空胞化細胞が侵入する(第9図)。

6). 上皮巢の一部が深部に不規則に侵入す(第10図)。

7). 之を強拡大して見ると主として膨大空胞化した異型細胞が浸潤せるのが見られる(第11図)。

術後経過: 手術創の感染の為に尿瘻を来したが術後約20日にして尿の流出は止み、瘻孔は術後約40日に至って治癒した。膀胱鏡検査を施行するに、憩室口のあつた部分には粘膜皺襞が放射状に集つている像を見るもその他の部分、両側尿管口共に異常を認めず、青排灌試験も右側初発3分20秒、深青4分25秒、左側初発3分50秒、深青5分55秒と全く正常である。退院時の尿所見は黄褐色で軽度に濁濁、蛋白(-)、赤血球(-)、細胞(-)で僅かに白血球及び上皮細胞の少数を認め、磷酸塩を多量に証明した。

總括並びに考按

自家症例を総括すると、32才の男子で既往に外傷性尿道狭窄があり、3ヶ月前より排尿時疼痛及び二段排尿あり、膀胱後壁の尿管口に近い左下部に大豆大の憩室口を認め、レ線撮影で鶏卵大の憩室を描出、正中線切開で腹膜外に膀胱に達しその左下壁を剝離して憩室に達し腹膜直腸より之を剝離し、示指大の憩室茎に於て切除縫合して手術を終つた。

憩室容量は180cc、内に砂様結石を蔵し内容濁濁し、憩室口は直径1cm、組織学的に白斑で一部悪性化を示した。

膀胱憩室については最近藤田氏、市川教授等の各々本邦例97例、125例(臨床104及び剖検21)に就ての詳細な統計並びに手術法の解説が記載されているからここでは詳述はさける。

部位的に見ると、本間、重松、Lower a. Higgins、Chwallaの統計で尿管口附近に多く、自家症例でもさうであるが斯様のものに対しては尿管の過剰形成と考えてもよい。

本邦の憩室剔除例は未だ少い様で、手術法としては予備的に膀胱切開後の剔除例が多いが、自家症例では憩室口が狭く憩室が大で壁

が肥厚していたから膀胱外切除法によつた。

外国ではPortheratの最高5.5l容量があるが、本邦で剔出された巨大例の最高は今北、陰山等の2800cc., ついで落合、赤阪、馬島の500cc., 300cc., 木下、森の150~200cc. (推定)、井上の160cc., 市川等の150cc., 藤田等の120cc., 等であるから、本例も巨大なものといえよう。

憩室内に白斑を認めた症例としては世界文献では楠によるとBlum, Bugbee, Czerny, Stevens (一部膀胱に及ぶ)の4例、本邦では藤田等の1例他2例に過ぎない。更に癌発生に関してはJudd a. SchollはMayo Clinicで133例中4, Lower a. Higginsは20例中4, Chwallaは76例中2, Kretschmerは236例中18, Abeshouseは1009例中30あつたと記しているが、本邦では岡、大村等の症例に止まる。

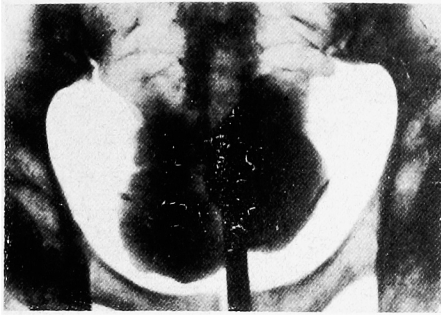
本例に於て憩室内に砂様の結石を有し、内層全面が白濁肥厚、面が疣状を呈し、組織学的には白斑(ロイコプラキ)で深部に胞巢が多数侵入し、既に細胞にBowen様の空胞状異型が認められ、一部不規則に間質に浸潤した所見が認められたが、原因は尿停滞によつて慢性炎症を招きその結果移行上皮の化生を起したものと考えられ、結石形成は続発性であろうが之亦炎症を助成せるものと推定され、ともあれ悪性白斑の状態では肉眼的には腫瘍形成はないが組織学的には癌に接近している興味ある所見を得た。

なお教室で剔出した3例の憩室を詳細に検索したところ1例に於て白斑を認め深部増殖を見た。即ち憩室に於ては粘膜を詳細に検すれば白斑合併は多くないかと考え、且憩室白斑は著者等の多数膀胱白斑の組織学的研究に比すると一段と悪性度が高いものと推察される。即ち膀胱憩室には癌発生の可能性があるものと思う。

結 論

巨大な膀胱憩室手術例を報告した。之を剔

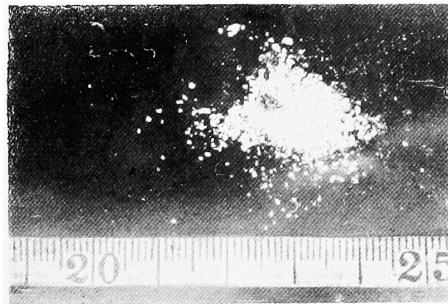
第 1 図



第 2 図



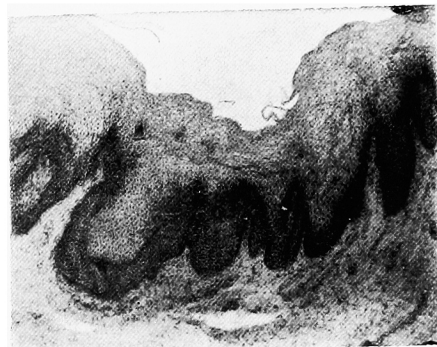
第 3 図



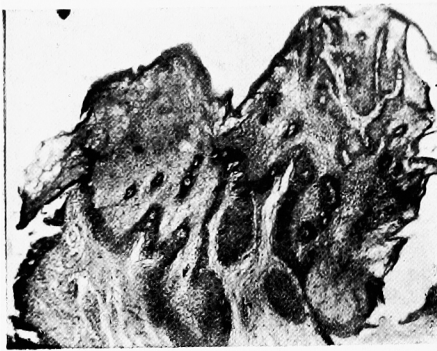
第 4 図



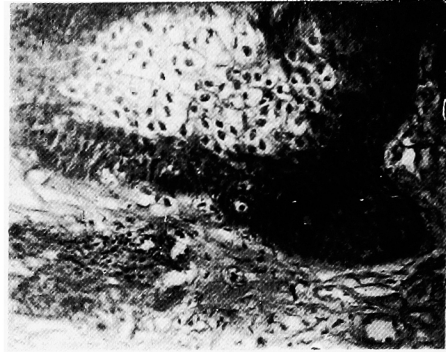
第 5 図



第 6 図



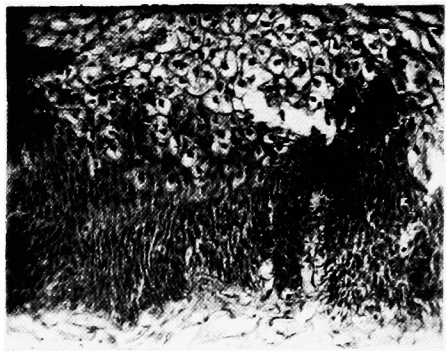
第 7 図



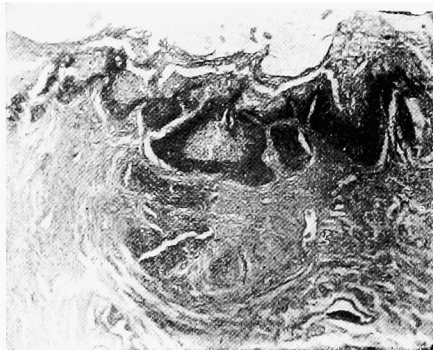
第 8 図



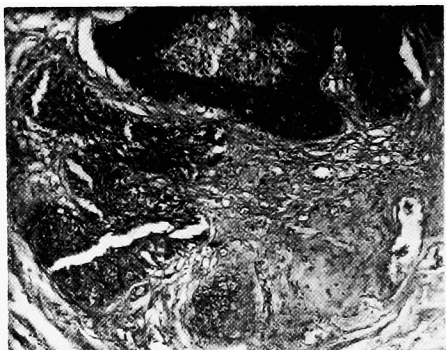
第 9 図



第 10 図



第 11 図



除したところ内に砂様結石と, 一部悪性化を示した白斑が証明された。

拙筆に臨み本稿の御校閲を賜った稲田教授に深謝す。

主 要 文 献

- 1) Barnes : J. Urol., **42**, 794, 1939.
- 2) Bugbee : J. Urol., **21**, 395, 1929.
- 3) Dees : J. Urol., **44**, 466, 1940.
- 4) Dodson : Urol. Surgery, 1950.
- 5) 本間, 重松 : 皮と泌, **5**, 438, (昭 12)
- 6) 藤田, 西原, 上出 : 臨床皮泌, **6**, 691, 1952.
- 7) 林, 正木 : 皮紀要, **40**: 145, 369. (昭 17).
- 8) 市川, 高安, 清島, 渡邊 : 手術, **8**, 551, (昭 29).
- 9) 今北, 藤山 : 日泌誌, **43**, 464, 1952.
- 10) 今北他 : 皮紀要, **48**, 51, (昭 27).
- 11) 稲田 : 日泌誌, **27**, 219, (昭 13).
- 12) 稲垣 : 日泌誌, **31**, 118, (昭 16).
- 13) 井上 : 皮尿誌, **15**, 493, 1915.
- 14) 石田 : 皮尿誌, **26**, 373, 1925.
- 15) 加藤 : 臨床皮泌, **4**, 493, 1939.
- 16) 木下, 森 : 皮尿誌, **46**, 60, 1940.
- 17) 北川, 能勢 : 日泌誌, **20**, 1, (昭 6).
- 18) Kretschmer : J. Urol., **21**, 381, 1929.
- 19) Kretschmer : Surg. Gynec. Obst., **71**, 491, 1940.
- 20) Kutzmann : Surg. Gynec. Obst., **56**, 898, 1933.
- 21) Lower a. Higgins : J. Urol., **20**, 635, 1928.
- 22) Lower : Surg. Gynec. Obst., **52**, 324, 1931.
- 23) 落合, 赤阪, 馬島 : 日泌誌, **39**, 14, (昭 23.)
- 24) 岡 : 皮紀要, **45**, 21, (昭 24).
- 25) 大村 : 日泌誌, **45**, 248, (昭 29).
- 26) Peirson : J. Urol., **43**, 686, 1940.
- 27) Stevens : J. Urol., **21**, 689, 1929.
- 28) Young : Practice of Urology, 1926.